

---

# エロにゃん受付嬢物語～愛は地球を救う?!

大輔華子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エロにゃん受付嬢物語〜愛は地球を救う?!

### 【Nコード】

N74890

### 【作者名】

大輔華子

### 【あらすじ】

それなりに一流な企業の受付嬢の体験談を小説にしたものです。彼女のニックネームは誰が付けたか「エロにゃん」<sup>TM</sup>。彼女と仲良しであり、ライバルでもある作者が、彼女の悲しい過去に同情しつつ、また、信じられない体験談にあきれつつ書き綴りました。

## 私とヒロちゃんのビミューな関係

私の名は松下恭華まつしたきよつかといいます。自慢するつもりはないけど、大学院を出たあと、とある大企業の秘書室にウン年間勤務しています。年がばれるからウン年間です。

秘書室は総務部の所属で部内には他に総務課と庶務課があります。秘書室は文字通り役員のスケジュール管理や取継ぎなどの連絡、訪問客の受付対応などを行っています。受付と言っても会社の総合受付は秘書室員の仕事ではありません。一階の受付には『受付嬢』の女性が二名いて、彼女らは総務課の所属です。

同じ受付であっても秘書室の受付と総合受付は根本的に求められているものが違います。

会社の受付は、その、つまり、受付『嬢』であって、秘書室の受付は、受け付ける『女』です。うーん、分かりにくいな……。会社の受付は会社の『顔』であって、秘書室の受付は会社の『顔の内側』です。ますます分かりにくい。役割の話はこの際やめた。

ウチの会社では総務課の受付嬢と秘書室の秘書はとても仲好しで、よく話もするしアフター5でも一緒にお茶したり、ウィンドウショッピングなどをする機会が多いです。でも、これはおそらく表の関係であって、お互いにアフター5に誘ってみて社員男性と妙な関係になっていないかをけん制していると言った方が本音に近いかも知れません。

よくよく考えてみれば、これはお互いにとって決して利益になる行為でないことは明らかですが、何故かそうなってしまいます。かくして、私、恭華は、秘書なので若い男性は恐れをなして声をかけ

にくく誘わない　男性に誘われないので私は暇になり受付嬢をお茶に誘う　予定が入っていていざというとき男性に「また是非誘ってね」と言つて断る　男性は金輪際こんな女は誘うものかと思う　恭華は次第に年を取っていく　ますます男性は誘いにくくなる　ますます恭華はムキになって男性を無視するようになる（元に戻る）、といういわゆる『負のスパイラル』に陥つて『婚期』を逃してしまつていゝのです。

だからね。そういう話じゃあないって！　私の話はこの際どうでもいいのよ。

受付嬢の一人にニックネームで『エロにゃん』という女性がいまゝす。エロにゃんの本名は岩下淑子（いわしたよしこ：絶対に仮名）といひまして、本名からくるイメージと当人のイメージがかなりかけ離れているがために、本名で彼女を語る人は男女ともに社内では殆どいません。皆、余程親しい人……たとえば私……、以外は彼女に面と向かつて『エロにゃん』とは言ひませんが、エロにゃん自身もそのニックネームを承知してゐて全く気にしてはひません。

私は、彼女の目が大きく『猫娘』に似てゐることからそう呼ばれるようになったと最初のうちは思つてゐましたが、『エロ』とセツトになつた時の『にゃん』は猫のにゃんではなく、たとえばベツドルームに備え付けられたスイッチを押すと七色の光が交錯するような場所でのにゃんにゃん、つまり大人の関係の『にゃん』であるかも知れないと思つたやうになつてきました。

大人の関係のにゃんとは、果たしてにゃんだ？

……うわあつ、おばちゃんギャグ出ちゃつたよ……

この問題はあえてスルーします。

工口にゃんは現在、二八歳です。

経歴を簡単に述べると、彼女は東北地方の高校を中退後、東京都下の場末の風俗店で働いている間に客で同い年の男性……名を岩下輝夫（これも仮名です）さんといいます……、と知り合い、懇意になって、十八歳の若さで輝夫さんとすぐに入籍、一年後に男の子を出産しました。生まれた子は、星輝<sup>せいき</sup>くんと名付けられました。彼女が東京に出てきてから出産まで一年半くらいの早業です。

ところが、その三年後、夫の輝夫さんはバイク事故で工口にゃんこと淑子とその息子、星輝くんを残しこの世を去りました。彼女は輝夫さんの死亡後、元の風俗店に戻り二六歳までの四年間働いていましたが、その後、二七歳になったある日、派遣会社の工口じじい、いえ、社長に誘われて一夜をともにして登録し、その会社から受付嬢として今のうちの会社へ派遣されるようになったという訳です。今では正社員となって小学三年生になる息子、星輝くんを一人で育てています。

うちの会社かもと風俗関係の女性を、そうと知って受付嬢に採用することなど考えられないような特例中の特例で、当時人事部長は猛反対をした経緯がありました。総務部長は工口にゃんのルツクス・スタイルの良さと人見知りしない明るい性格にとことん惚れこんで、人事部長に真っ向から対決を挑み、人事部長と同じ大学の先輩である総務部長がこれを強引に押し切って採用することとなりました。

ところで、私は工口にゃんの秘密を一つ知っています。彼女はうちの会社の受付嬢となった今でも土日は風俗店で働いており、時々急に月曜日会社を休むことがあります。そんな時、私、恭華は彼女

のピンチとして自分の仕事の予定はそのままに総合受付を半日以上やらされることがあるのです。

総務部長は秘書室長兼任ですから、直属上長としての指揮命令権を発動します。

「エロにゃんがまた月曜病だ。彼女はああ見えても意外とデリケートなんだよ。華ちゃん（私の愛称です）、君には今日一日ピンチを頼むね」

……月曜病?! 違うよね。あのね。彼女はね。二日酔いか、にゃんにゃん疲れだよ。もういい加減にしてよね……

そう確信していても、私はそれを決して口に出しません。いえ、出せません。

エロにゃんがたった一人で上京した時のこと。頼りにしていた夫、輝夫さんとの病室での無念な別れ、息子、星輝くんの小学校の入学式での彼女の涙。それから、うちの会社に必死で食い下がった時のこと。彼女との話の中に、私は自分とは根本的に違う境遇とそれに孤独に立ち向かう一生懸命さを強く感じていたのです。

彼女のマンションにプレゼントのラジコンカーを持って訪れたときの彼女の息子、星輝くんのまさに星のように輝く目。一緒になって輝く彼女の大きな瞳……。目に焼きついて離れません。

この話は、彼女から直接聞いた、とても信じられないような不思議な話です。彼女がうちの会社に派遣される一年前の二六歳、当時息子、星輝くんは小学校に入学したばかりの頃の話です。

たとえば彼女の話の中では明らかに一人の人間が死んでいるのに、その跡形も有りません。ニュースにもなっていない。信じられない話ですが、それを熱心に語る彼女の目を見ると、もはや私はその話を疑うわけにいかなくなってきました。

## 風俗嬢エロにゃん

エロにゃんこと、岩下淑子は、都下のアパートで小学校に入学したばかりの息子、星輝と母子二人で暮らしていた。彼女は歩いて十分ほどの場末の繁華街にある風俗店『秘書室』にほぼ毎日通い、そこでホステス嬢として働いていた。店の休みは月曜日のみだ。

毎日の日課は夕方、息子、星輝が学校から帰宅するとその後アパートから店に向い、帰りは朝方四時半頃になる。帰宅すると朝御飯をこしらえて仮眠を取り、息子、星輝を起こし一緒に朝御飯を食べ、学校へ送り出す。そしてまたすぐ眠りに就く。午後二時半頃に起きて買い物に行き、昼夜を兼ねた御飯を食べて夕御飯を用意し、息子、星輝の帰宅を待つ。彼も心得たもので、午後三時には家に帰らないで学校で遊んでいる。

その日もいつものように夜五時半頃にエロにゃんは店に出た。場所的には場末の住宅街の最寄り駅近くの繁華街に店を構えているので、いつでも流行っている都心の商業地の風俗店と違い、地元の人寄り連中がごく早い時間にぱらぱらと、金曜日は通勤サラリーマンがかなり遅くに店を訪れるというパターンだ。

商店街で顔を見たことのある年配のおじさんが二人連れ立って店に入ってきた。お目当ては店でナンバーワンのエロにゃんである。

「お帰りなさいーい！」

二人のホステスが早速おじさん達の腕を捕まえ、奥の方へと連れ込む。エロにゃんはニコニコしながら二人のホステスを顎で使うように店の奥へと導く。客は離れていく彼女を見ながら名残惜しそう

に『いやいや』をしながら、それでもまんざらでもなさそうな顔をして二人に引かれるがままに奥のほうへ向かった。二人の男の姿が暗闇に紛れて消えた後、少し遅れて、一人の体格のいい中年の男性が入ってきた。背広にネクタイ。それに、大きなツバつきの野球帽という見るからにミスマツチな格好だ。

「いらつしやいませ」

エロにゃんはその男のもとへ小走りに駆け寄った。男は何も言わずに顔の向きを上から下まで、彼女の全身を確認するかのようにつくりと動かしていった。

「ちょっと。ど助平ちゃん。欲しがりすぎよーん」

「ドスケベ……。だと？」

エロにゃんは、……変な人……　と思いつつも腕をその男の背中に戻し店の奥へと促した。

## 東京スカイツリーなその男

その男は終始無表情であったが、股間はまさに東京スカイツリー状態であった。

「僕は君に決めた。明日から僕は君の家に住む」

「ちよつとつ。それって変じゃない？ 普通は『明日から僕の家に来なさい』でしょ？」

「金ならいくらでもある。無いのは住む所だけだ」

「ぶーっ！ それって全然説得力無いんですけど」

「いや。君に見せたいものがあるんだ」

男は店の入り口で預けた、まるで岩を入れたように重たいポストンバックを持って来させて、ファスナーを空けた。中には一万円札の束がざくざくと無造作に突っ込まれていた。エロにゃんには札束を数えた経験は全く無かったが、ざっと見ても数十束、いや、百束以上は有りそうだ。

……一束百万円で、百束以上。いつ、一億円?! ……

「ちよつと見せてよ」

薄暗い店内で懐中電灯を使って見る限り、きちんと光を反射するものや透かしが入っていて本物のように見える。札束の二枚目以降もちゃんとしたお札のようだ。

「ヨコハマというところに船があり、十個のコンテナにはこれがぴったりと詰まっている。あと一個のコンテナには君たちの好きなダイヤモンドがびっしりと詰まっているんだ」

どうも言い回しがおかしい。『ヨコハマというところ』という言い方。どう見ても日本人男性にしか見えないし、日本語が流暢だが、横浜を知らない日本人はまずいない。

「あんた何者？ 何してる人？」

「何もしていないよ。金持ちなだけだ」

エロにゃんは考えた。変な男ではあるが、怖い人ではなさそうだし、しかも言葉には優しさが感じられ頼り甲斐も有りそうな感じた。

……インチキ男かも分からないけど、革靴の中敷きをめくって臭い一万円札を大事そうに出してくる男に付いて行くよりは夢が持てそう……

「分かったわ。あなた私のところへその鞆持って来なさい。明日じやなくていいわよ。今からでも」

「そうだね。君はアンザン型のようなので、まずは君の家で生殖活動を連続して行うことにしよう」

「……安産型？ ですか？ 私が。生殖活動って……。ああそう言うことね」

……やっぱり、単なるど助平かい！ ……

## エロにゃん再婚

エロにゃんは、その日店長に『鴨がネギ背負って来ましたので、今日は店を出て明日、外から同伴して常連さんになってもらうようにします。今日の個別（行動）はお給料から引いておいていいですから……』と言って、男と共に店を出た。

エロにゃんの部屋に上がりその男が服を脱ぐと、その男は服の上から想像していたよりも意外に貧弱な体つきだった。しかし、東京スカイツリーだけは取って付けたように、見た目がもの凄いものだった。

男は自分の名を山城樹やましろうじつきと自分で名乗った。

樹は、翌朝『仕事に行く』と言って札束の入った鞆をエロにゃんの部屋に無造作に残したまま、彼女の息子、星輝が起きる前に一人で出掛けて行った。宵の口、彼女と外で落ち合い同伴で店に入る。彼女は樹の鞆からお札を予め抜き取っておいて、店にはそれを支払う。そしてまた夜半に彼女と樹は連れ添って店を出て彼女の部屋へ帰る。

そんな毎日が続いた。店としてもエロにゃん目当てに店を訪れる客に対して『あいにく今日は……』を繰り返さなければならず、面倒ではあったが、予想の三丁四倍以上の金銭が安定的に手に入るため、特に文句を言うことはなかった。

一つの疑問。

樹は『仕事に行く』と言って毎朝エロにゃんと別れ、宵の口に彼

女と再会するが、仕事とは何だろう。もし、本当に何らかの仕事をしていたとすれば、彼はいつたいつ寝ているのだろう。少なくとも彼女と一緒にいる間、彼は一睡もしていない。

ある日、エロにゃんの息子、星輝が偶然に早起きしたことから樹と二人がばったりと顔を合わせる事になった。

息子、星輝は樹を見上げ、驚きもせずに突拍子もないことを口にした。

「おじちゃん、宇宙人でしょ」

樹は興味を持ったように星輝を見た。

「何故そう思うんだい？」

「だっておじちゃん、息してないもん」

その場所まで来ていたエロにゃんは慌てて二人の間に割って入った。

「星輝。何てこと言うの?! おじさんに謝りなさい!」

しかし、彼女はむしろその後の樹の言動のほうが気になっていた。

「そうか。息ねえ……そうか。」

もしかして息子の星輝はとうに樹の存在に気が付いていて、朝夕時々寝たフリをしていたのかも知れない。そして、樹のことを子供なりにじっと観察していたのかも知れない。子供というのは、大人

が考えるより意外と『したたか』で観察力や勘も鋭いことがある。

エロにゃんと樹は何日も一緒にいて、しかも店でも殆ど一緒だったので、すでに心は充分通い合っていたし、お互いの性格も理解し合うようになってきている。しかし、彼の素性が分からないことに彼女はやや不安を感じていた。住居がないので住民票の記載も無い。出生についても彼は語ろうとしない。それ故、どうしても決心して結婚に踏み切ることができない。

エロにゃんの息子、星輝はもうすぐ小学二年生だ。そろそろ彼女も結婚に踏み切ろうと考えていた矢先のことである。

朝、エロにゃんの部屋に二人で帰った樹は、彼女の氏名欄以外はすべて記入捺印済みの『婚姻届』を差し出してきた。見ると、証人欄にもきちんとして記入がある。戸籍謄本なるものも用意されていて、本籍は横浜市になっている。彼女は不思議に思ったが、深く考えずこれに署名し捺印した。

## うつ病の男

入籍してからも新家族のパターンは何一つ変わることはなかった。金銭面の不安は全くなかったし、生活は段々と外食や高級な惣菜を買ったことが多くなってきて、エロにゃんが台所に立つことは殆どなくなった。普通の新婚生活とはむしろ逆のパターンである。

樹は必要最低限以外の家事をエロにゃんに求めることはなかったし、金は使い放題だった。息子、星輝の衣服やゲーム機、そのソフトなどはふんだんに買い与えられ、見た目は貧乏生活、金は使い放題という実にアンバランスな生活が続いた。

樹がエロにゃんに求めるものは、殆ど毎日数回の彼曰く『生殖活動』だけであった。

エロにゃんはそんな生活に逆にストレスを溜めるようになり、入籍間もない時期より、いわゆる『出会い系』サイトで数人の男性とメール交換するようになった。お相手の男性が、『サクラ』であったのか、すでに数十万という高額の手配料金を支払いながら、まだ、一度も実際に男性と出会えたことがない。いよいよ出会いの場所や時間をきつちりと決めることができたかと思うと、思いつきり当てが外れることばかりだ。

お相手の男性曰く、『お会いする時の、あなたの服装目印を教えてください。私は、花柄のワンピースに熊柄の下着です』と……。

……それ違うよー！ だいいち公衆の面前で、下着を目印にするなよ……

『実はボク、M男です。ハイヒールで思い切り踏んづけてね』とか。

『私は、医者です。だからお医者さんごっこが大好きです』とか。

……だから、じゃないだろ。違う！ 違う！ 趣味からして違ってるから……

もつと変なものになると、『大食い競争しませんか？ 自信ありますか？』とか、『水中で生活しませんか？』とか、『ついにタイムマシン作りました』とか……。

……もう、違うとかそういう問題じゃないし！ ……

そんなある日、ある一通のメールがエロにやんの目にとまった。

『私は重度のうつ病です。かつては精神病とまで医師に言われたこともあります。でも、入院はしていません。病院に見放されたのです。最近では親兄弟にも見放されています。でも、私は人間として生きている。そう思いたいのです。そう信じたいのです。こんな私でも良ければメールだけでもお付き合い下さい』

エロにやんは大いに興味を持った。こんな悲惨なメールは絶対に『サクラ』ではない、実在する男性だと直感した。今、自分はストレスの塊に悩まされている。しかし、この携帯の向こう側には、現にもつともつと悩んでいる人間がいる。

……私の悩みなど、ちっぽけなもの。今は彼を助けてあげなければ

……

エロにゃんはメールを送った。

『私は結婚間もない二六歳です。無くなつた前夫との間に子供が一人います。今の生活は金銭面で満たされているだけでストレスだらけです。でも、私の悩みなど、あなたに比べればちっぽけなものです。お互いに心の支えになりませんか？』

それからというものの、メール交換は本格的に始まった。お互いにサイトを通じずに直アドを交換し、多いときには日に三十通以上の返信を互いに毎日交わした。ちょうどその頃から、息子、星輝がたびたび授業をサボってどこかに蒸けていたり、同級生へのいじめが酷くなつたりと学校で問題になってくるようになった。

## 保護者面談

エロにゃんはとうとうある日、学校に呼び出された。

息子、星輝の担任の先生には初対面だったが、その先生は三十歳代半ばくらいの温厚なタイプの男性教師であった。話し方も礼儀正しく落ち着いた感じの先生だった。

名前を柴田先生という。

ところが、エロにゃんが父親と共に子供を半ば放つたらかしにしている様子を聴くにつけ、段々と溜まっていた怒りが込み上げてきたのか、人が変わったように声を荒げるようになった。

エロにゃんの目には次第に涙が溜まっていった。相手にきつく言われているからではない。息子、星輝のために今までどんなに辛いことがあってもじっと耐え、がんばってきた自分が、逆に今は抜け殻のように子供を放任してしまっている。愛情まで失ってしまったかのように……。

そんな自分が憎たらしくてどうしようもなかったのだ。

目の前で、強い口調で自分を叱咤する先生。その言葉はエロにゃんにとって辛くて聞いていることができなくなり、単なる音声となっていた。

エロにゃんの意識は机の下の掌に隠れている携帯に移されていき、自然とあの人のアドレスを呼び出していた。

……あの人……

……自分が重度のうつ病、精神病という彼。何百通ものメールをやり取りした彼。ああ、あの人に会いたい……

エロにゃんは精神に障害がある彼に少しでも力になることができたら、というつもりでメール交換を始めたわけであったが、今では逆に必死になって彼に助けてもらおうとしている。

柴田先生の話の聞いているフリだけしながら、エロにゃんはメールを送信した。

『あなた。私はもう駄目です。子供を育てる事が出来ません。そんな資格のない人間です……』

話を聞いていないことに気が付いたのか、目の前の柴田先生は一気に眉を吊り上げ気を吐いた。

「ちょっと待って下さいよ！」

柴田先生はため息をつきながら、ゆっくりと席を立ち窓の方へ歩いて行った。

いつものように即座に返信があった。

『どうしたの？ 君は子供のことで悩んでいたけど、その子供がまた何かしたの？ もっと詳しく教えて』

もっと詳しく、これが安心感だ。

『ごめんね。急にそんなこと。あなたに。やっぱりあとでもっとち

「やんとメールするわ」

ところが、メールの彼は退かなかった。

『メールはもういいんだ。会おうよ。君に会いたいんだ。君のイメージがどんなに変わってもいい。僕は今、自分の気持ちを抑えきれないんだ!』

教室内で突然柴田先生が振り返った。

「山城さん。もう、はっきり申し上げてあなたのお子さん、星輝くんの話ではなくて、親であるあなたに何とかしてもらわないと、これはどうしようもありませんよ。」

それでも、先生の言葉を無視し、もうとっくにはれている手元の携帯に目を向けるエロにゃん。

『私、あなたに今から会う!』メールを送る。

柴田先生は自分の言葉を無視している彼女に対して、いわゆる、堪忍袋の緒が完全に切れていた。

「お母さん! いい加減にしてくださいませんか!」

それでも無視してエロにゃんは発信する。

『これからAライン線、河童平駅北口改札に行きます。そこで会いましょう。私はストライプワンピースにエンジのカーデガン、ピンクのブーツで行きます』

そしてまた返信があった。

『ありがとう。君に会える。本当にありがとう。』

エロにゃんはなおもメールを送り続ける。

『ありがとうございます。私も胸が一杯です』

『あと、三十分くらいかかるよ。』

『あなた、今どこ？』

『小学校の校舎の中。』

『小学校って？ どの？』

エロにゃんには、窓の方を向いている柴田先生の携帯電話のLEDがぴかっと光ったのが見えた。メールの受信だ。

『角町第二小学校だよ。僕は精神病って言ったろう。嘘じゃない。それでも学校の先生なんだ。病歴も、今、精神科医にかかっていることも、みんな隠している。あきれただろう。精神病の教育者さ』

エロにゃんは柴田先生の掌に開いたままの携帯電話があることに気が付いた。彼の指は彼女と同じように携帯を打っている。間違いなく……！

……まっ、まさか……

メールでのやり取りの途中から予感が有ったが、それが的中しエ

口にゃんは愕然とした。メールの相手は目の前の柴田先生に間違いなかった。

……柴田先生が、あの人……

柴田先生は目の前の彼女がメールの相手だとは全く気が付いていない。そうと分かったら柴田先生に会うことなど絶対にできない。

『これから向かうよ。待ってる。遅れてもいい。ずっと君を待っているから』

エロにゃんは覚悟を決めた。

……私は子育ても出来ない女。それが悩み。あなたは先生。悩んでいる先生が私を助けるのよ。ほら、あなた生きているでしょう？  
そう、生きているのよ。生きているからあなたが必要なのよ。相手が誰であっても、私もあなたもお互いを捨てることなどできないはずよ。絶対に……

エロにゃんあぶない！

エロにゃんは目の前の柴田先生に、『メールの相手は私です』と言う勇氣はなかった。勇氣がなかったというより、改めて携帯の中の男と女という会い方でないと、今までのお互いのメールが全て無意味になるような気がしたのだ。Aライン線の河童平駅を待ち合わせに場所に指定したのは、携帯の中の彼女であって、エロにゃんではない。そして、携帯の中の彼はそこへ向かうのである。

柴田先生は、『もういいです』と言い、エロにゃんを解放した。

彼女は帰宅して服装を着替え、携帯の中の女になって待ち合わせ場所へと向かった。河童平駅は、一応、人目を気遣って最寄駅の三つ隣の駅である。柴田先生は自動車通勤である。おそらくそのまま車に乗って最短距離で駅の駐車場まで来るだろう。そうなる待ち合わせ場所に着くのは彼女の方が後になる筈である。相手には彼女の服装を連絡してあるから、見つけて声を掛けるのは相手の役割だ。柴田先生がエロにゃん、いや、彼にとつては星輝の母である淑子と知ってそれでも声を掛けるのか、それとも……。

電車の中で、エロにゃんの携帯電話がメールを受信して振動した。メールの発信は、夫の樹からだった。

『今日は店には出ないんだろう？　じゃあ待ち合わせ場所はいつものところじゃなくてホテルに近い河童平駅にしよう。今から二〇分後、河童平駅北口の改札口で待ってるから来てくれ』

……ええっ?!　まっ、まずいよそれ!　場所も時間も同じじゃないの!　たっ、大変だ!!　……

『あなた。今日はアパートに帰って待っててね。私寝てないから眠いの。今日はデートはキャンセルよ』慌ててメールを送る。

『いいよ。駅前ホテルの豪華な部屋を取るから、君はそこでぐっすり寝ればいい。生殖活動は睡眠取ってからでいいよ。北口改札ね』

『あなた。ダメダメ。今は駄目。だめだめだめだめ。だめー！  
家に帰って。早く』

『どうしたの？ 駄目って何が？ まずは睡眠だろう？ もう着くから。待ってるよ。なるべく早くきてね』

……アウトだ。どうしよう。メールの彼と柴田先生だけでもややこしいのに、宇宙人みたいな夫まで一緒になっちゃった。もう私どうしたらいいか分からない……

エロにゃんがぼつつとしてしていると、電車はすでに河童平駅に滑り込んでいた。ただ、どうしたらいいか分からず、とぼとぼとホームへ降り立つ。北口は右方向。携帯の中の精神障害の彼を見捨てて帰る訳にはいかない。しかし、対応の途を絶たれた彼女は北口を恐れその場に立ち尽くす。そして、ふと思った。

……そうか。夫も柴田先生もお互いの顔は知らないんだ。やっぱり私がここにいたらまずいんだ……

そう思って南口に向かい始めた時である。

「あれ？ 星輝君のお母さん。またお会いしましたね」

……柴田先生だ……

……超。まずい……

「ああ。先生。こちらで何なさってるのですか？」

「いやあ。ちょっと人と待ち合わせしてましてね。でも初対面なので……。それが、紛らわしいんですよ。私の相手の方の服装とあなたの今の服装がほとんど同じだったから、てっきりあなたがその方だと思つて声をかけてしまいました」と柴田先生。

「……ええっ?! 気が付かないわけ? 私が『てっきりその方』だよ。本人だよ。超鈍感というか、ノウテンキというか。何? この予想しない展開つて……」

エロにゃんが言葉を失つておろおろしていると、突然後ろから大きな声が聞こえた。

「おい! 淑子。その男は誰だ!」

言うまでもなく夫、樹の声である。

「あなた。星輝の学校の先生よ。柴田先生」

柴田先生の超鈍感によつて、この場は何とか乗り切れそうであるところか……。

「もつ、もしかして、ケメ子さん。私の愛するケメ子さん。本当はあなただったのですか?」

『ケメ子』とは、エロにゃんのメールでのニックネームである。

……ああ。何で急に頭が鋭く回転しちゃうわけ？ そのままで良かったのに……

「おい！ ケメ子とは何だ。おまえ、人の女房に向かって愛するとか、私のケメ子とか、ふざけたことを抜かすな！」

……夫の樹。こんなにヤキモチ焼きだったかあ？ 何で急に性格変わるわけ？ やっぱりあんた宇宙人だね。マツタケ……

次の瞬間、エロにゃんは、この世のものとも思えない信じられない光景を目にした。樹の頭が紫色に輝きだして光を発したと思うと、その光の先で淑子の隣に立っていた柴田先生の頭が一瞬にして消え去り、首から下も段々と上から消滅していった。そして数秒のうちにその場には跡形もなくなった。

エロにゃんの口は声を発するために開かれていたが、呆気にとられたように開いたまま閉じない。

……ええっ！ ああ。あんた、そんな。ウソ！ まさかっ！ うっ、宇宙人かよう。ホンマものの……

ここにいてはいけない、と一瞬のうちに彼女は直感した。……夫の樹は人間ではない…… このことだけは確かなような気がした。南口改札口を全速力で駆け抜け、駅前に置いてあった自転車に飛び乗って全速力で突っ走る。幸か不幸かこの時間帯での駅の乗降客は殆どいない。走りながらエロにゃんは一瞬後ろを振り向いた。夫の樹は腕が前足となって四足で追いかけてくる。

「ぎゃあああああ」

断末魔の叫び声を発しながら、彼女は殆ど車の走っていない車道を疾走した。頭の記憶には、夫、樹との数限りない夜の生活が蘇る。

……もしかして、もうすでに、私のお腹の中には四足の怪物が宿っていたりして……

「いやあああああ」

## 病院の怪

人間を瞬時に消してしまうような凄いことをする割に、樹の足は意外に遅いのかも知れない。しかも四足でだ。自転車で逃げる車道が若干下り坂になっていたとはいえ、女の足でごく自転車が簡単に彼を振り切ったようである。エロにゃんの自転車は、その昔、愛する夫、輝夫が交通事故で運ばれ、息をひきとった救急病院の駐車場に来ていた。樹が追ってくる様子はないが、そのうち追いついて来るかも知れない。

……ともかく、隠れよう……

樹がエロにゃんに近付いてきたことの目的が何であるかは分からないが、少なくとも彼女を殺したり傷つけたりすることはないように思えた。しかし、あの紫色の光といい、四足での走りといい、彼女に自分の正体を見せたことは確かだ。彼女が樹に恐怖を感じて逃げ隠れるのは、『今度、自分に何か別なことをしようとしている』という恐怖感があったからだ。そして、それはさせてはいけない、と思う。理屈ではない。それは人類の細胞に刻み込まれた種の保存の本能なのかもしれない。

エロにゃんは病院の正面入り口から中に入っていた。会計窓口の前には数人の待合客が座って呼ばれるのを待っている。看護士さんがカルテを抱えて脇を通り過ぎる。若い医者も廊下を歩いている。入院患者らしき人が検査を終えてとぼとぼと歩いている。ごく普通の病院の光景だ。ただ一つ、彼女にとって他の病院と違うところ。それは、夫、輝夫の亡くなった病院、悲しみの漂う空間、ということであった。

最後の思い出の場所となった地下の霊安室へ降りようとして、エロにゃんはふと嫌な予感がした。そして立ち止まり後ろを振り返った。

病院の入り口付近に樹がいる。もはや樹は人間の姿をしていなかった。それが樹と分かるのはおそらくエロにゃんだけだったであろう。彼の振りまく独特の『雰囲気』はある一定の波長を常に彼女の頭の中へ送り込んで来るのだ。

もう一つ。この病院が他の病院と決定的に違うところがあった。これは彼女でなくとも分かる。

この病院は三年前に閉鎖され、人っ子一人いない『廃病院』となっているのだ。

エロにゃんは霊安室へ行くのを止め、柱の影に身を隠した。相変わらず、看護師や医者や入院患者が沢山フロアを行き来している。そのうち入院患者がこのフロアにどんどん集まってきた。霊安室からも大勢の人たちが階段を上ってきた。

……この人たちは、いったい何なの？ ……

樹が左右に首を振りながらずると病院の中へ入ってきた。前足が極端に長い四足。全身漆黒である。ロビーのほぼ中央まで進んできたとき、柱の影にいたエロにゃんはあっさりと樹に発見された。

「ギャオウ！」

樹は大きな叫び声を轟かせゆっくりとエロにゃんのいる柱の方へ歩いてきた。彼女は固まったように身動き一つできない。

霊安室のほうからは、上がってきた人々が樹の方へ進んで行き、樹を取り巻く。どんどんと人が増えてきて樹を幾重にも取り囲んでいった。

その時、樹の頭が紫色に光った。樹の頭はぐるぐると回りながら光が皿のようになって取り囲んでいる人々にふり注がれる。たちまちのうちに人々は首を失って上から消えていく。しかし、霊安室からはどんどん人が上がってきて樹に近付いていく。樹は気が狂ったように走り出し、次々と人々に紫色の光をふりまいているが、群がる人々に体のあちらこちらを蝕まれていき、その姿はやがて液体のようになり、最後には蒸発してなくなった。

樹は消えてなくなった。その瞬間からフロアに溢れんばかりいた人々の姿は消えていき、最後に一人の男の姿が残った。

……あなた……

その姿は紛れもなく、交通事故でこの病院に運ばれ、亡くなった愛する夫、輝夫の姿だった。

……淑子……

……あなた、まだこんなところでうろろしていたの？ 頭大丈夫？ もうこの病院はとっくに閉鎖されたのよ……

亡くなった夫、輝夫は生きていたときと同じ。とつても無邪気な表情をしている。エロにゃんはこれ以上ない、というような笑顔を湛えて見せた。夫、輝夫の表情が明らかに変わった。

彼女と同じ。これ以上ない、というような笑顔。

「ありがとう、あなた。あなたにもう一度会えるなんて思ってもみなかった。エイリアンさんに感謝しないとね」

……ははははは……

夫、輝夫の笑い声がエロにゃんの耳に響いた。

「ははははは」

彼女も大きな声を出して笑っていた。

ええ?! またあ?

エロにゃんはいつしかまっすぐに輝夫の目を見つめていた。そして、輝夫も彼女の目を見つめる……。

「ああ、あなた」

「淑子」

輝夫はこの世の者ではない。下半身が薄くぼやけているようにも見える。

……お願い。神さま、仏さま、閻魔さま。彼を消さないで……

すると、どうしたことだろう。彼の下半身はだんだんと輪郭を取り戻してきた。

……ええ? ……

輝夫の下半身にはつきりと『東京スカイツリー』が浮かび上がった。  
てきた。

……そこだけかよ……

エロにゃんは輝夫のほうに一步二歩と歩を進める。彼もずずずと彼女のほうに近づき二人の距離はお互いに手が届くほどとなった。

その時である。輝夫の背後に見覚えのある顔が重なるように見え  
てきた。

「ケメ子さん……愛してる。私のケメ子……」

……まっ、まずい。柴田先生だ。あなたさっきエイリアンに消されなかつたっけ！……

輝夫は振り返った。そこには彼の見たことのない男の姿があった。よく見ると男の下半身も薄ぼやけているが、何故かそこにはエンパイアステートビルがそびえ立っていた。しかもその先端にはキングコングのような奴がいて、何かフィギュアのような女性を握っている。

「おい！ ケメ子とは何だ。おまえ、人の女房に向かつて愛するとか、私のケメ子とか、ふざけたことを抜かすな！」

……まっ、またあ？！ もうやめて！ 輝夫まで。こんなにヤキモチ焼きだったかあ？ しかも今度は両方とも人間じゃないし……

エロにゃんは急に身の危険を感じ、男の目線からお互いに火花が飛び交っている間に、二人に背を向け脱兎の如く逃げ出した。

病院の入口を出た時、いきなり背後で大きな爆発音がしたかと思うと、激しい地鳴りと振動が伝わってきた。

びびびび、ぐわあっしゅ、ちゅちゅちゅちゅ、ちゅどーん！

振り返ると、病院の屋根の真ん中あたりからつむじ風が舞って、火柱が空高くごうごうと上がっている。

熱風が肌に当って、お化粧が台無し。髪もパサパサ。

……ちよっとう。やめてほしいなあ……

どこかで聞いたことのあるフレーズであるが、この際そんなことはどうでも良い。エロにゃんは入口近くに停めてあった自転車にまたがり、再び河童平駅に向かってペダルを漕ぎだした。

……私って、もう少し普通の人間に縁がないかなあ……

## 私とエロちゃんの「ミュー」な関係のヒーロー

エロにゃん受付嬢こと、岩下淑子さんは、今でも私と一緒にお酒を飲んだりすると、上京した時のこと、頼りにしていた夫、輝夫さんと病室でお別れした時のこと、息子、星輝くんの小学校の入学式のことの三点セットは必ず話します。

でも、話に感情が入り過ぎてくると、その後、とても信じられないような不思議な話を始めます。

そんな時、私は決まって彼女にこのように言います。

「宇宙人ですって？ しかも夫の霊が地球侵略のエイリアンを倒したって？ それから何ですって？ 幽霊対決？ あんた、変な小説読み過ぎてない？ 頭の中でホラーとSFとコメディがごっちゃになってるよ」

そして、こっつけ加えます。

「ねえ。エロにゃん。その話、私以外の人に話さないほうがいいよ。ねっ」

しかし、話を熱心に語る彼女の目を見ていると、どうも私まで疑いを感じなくなってしまっているので、気を付けて彼女の目は見ないようにしています。

今日もまた、エロにゃんは感情が昂ぶってその話をして、満足そうにしています。

「華ちゃんただけだなあ。何でも本音で好きなこと言えるのって」

「エロにゃん。それって私が鈍感ってこと?」

「違う! 違うってば! そういう意味じゃなくって……」

「いいんだつて。エロにゃんも私も同じ。お互いお騒がせ人間ね。気を付けないとね……」

今日も大好きな、『しよこらモンブランのロールケーキ』を頼張りながら、私とエロにゃんは似た者同志、仲良しこよしです。

別れ際、小走りに私のもとを離れて行きながらエロにゃんは言いました。

「ねえ。華ちゃん。あたしこれから、愛する輝夫の霊とホテルでにゃんにゃんするから、明日は休むわね。会社の受付ヨロシク!」

「なにい? 嘘つけこのう!」

「ばれたかあ。あのね。エイリアンと幽霊の話。半分ウソ。でも半分よ。残りは全部本当。ごめんね、ごめんね……。はは」

「全部嘘っぱちだろう。こんにゃろ!」

私はむきになって叫びます。

その時、何故か怒りが笑いへと変わって、ぷっ、と吹いてしまいました。

気が付くと、エロにゃんの夕空に響く無邪気な笑い声を、沈みか

けている太陽が耳で捉えて、まるで私の代わりをしてくれているかのように真っ赤になっていました。

……今日はゆっくりお風呂入って早めに寝よう。明日は忙しいものね……

足の速いエロにゃんは既に夕陽の下で米粒のようになっていました。

……あなたは信じます？ この話。私はエロにゃんの話、やっぱり信じることにします。但し、くれぐれも半分だけね……

〓 〓 了 〓 〓

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7489o/>

---

エロにゃん受付嬢物語～愛は地球を救う?!

2010年11月6日21時07分発行